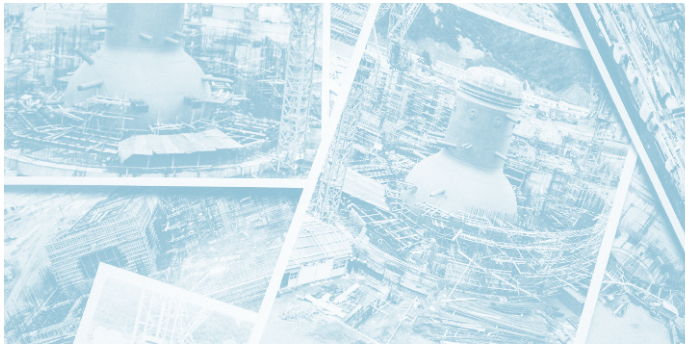
LOOSE FACE

わたしとまちと原子力





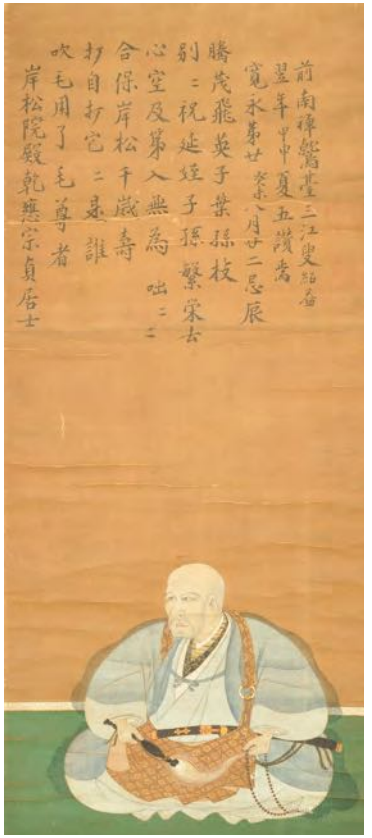


つるがのドーナツの穴

其の壱

打它と桑原武夫（うた　くわばらたけお）

福嶋輝彦（株式会社ピー・ティー・ピー）



福井県指定文化財『絹本著色 打它宗貞像』（個人蔵）

国宝・俵屋宗達筆『風神雷神図屏風』は、江戸時代の敦賀の豪商打它家が発注者だった、と聞いたことがある。歴史文化に基づくまちづくり・都市計画の権威である越澤明先生（北海道大学名誉教授）から、「打它」にまつわる興味深い話を教えて頂いた。「越前大野城を築き、飛騨高山藩主となる金森長近は、大野の町人糸屋彦次郎を、高山に連れていき、鉱山開発を担当させた。茂住鉱山などで大成功をおさめた彦次郎が、茂住宗貞となり、その後金森長近は、宗貞に金森姓を与えた。長近の死の直後、宗貞は高山を退去し、越中で、打它（蛇を打ったというエピソードから来ているという説あり）と改姓し、能登を経て、敦賀に居を置き、小浜藩京極家、酒井家の元で、敦賀代官として海運業を営み、敦賀の豪商打它となった」打它宗貞、山師を束ねるオーガナイザーであった。敦賀市立博物館の坂東佳子学芸員からも伺った。「打它家は、江戸時代を通じて、敦賀第一の家格を保持した家である。宗貞の息子公軌は京都に出て、大名貸で富を築き、その和歌の師匠である木下長嘯子とともに、京都の文化人、パトロネージとして、サロンを形成した。その公軌こそ、俵屋宗達に『風神雷神図屏風』を依頼し、描かせたと思われている」「敦賀空襲において蓬莱町にあった打它家の屋敷は関係資料ともども焼失した。だが、宗貞肖像画は残り、令和3年福井県指定文化財に登録された。豪商の肖像画としては、最も古いものの一つと思われる」

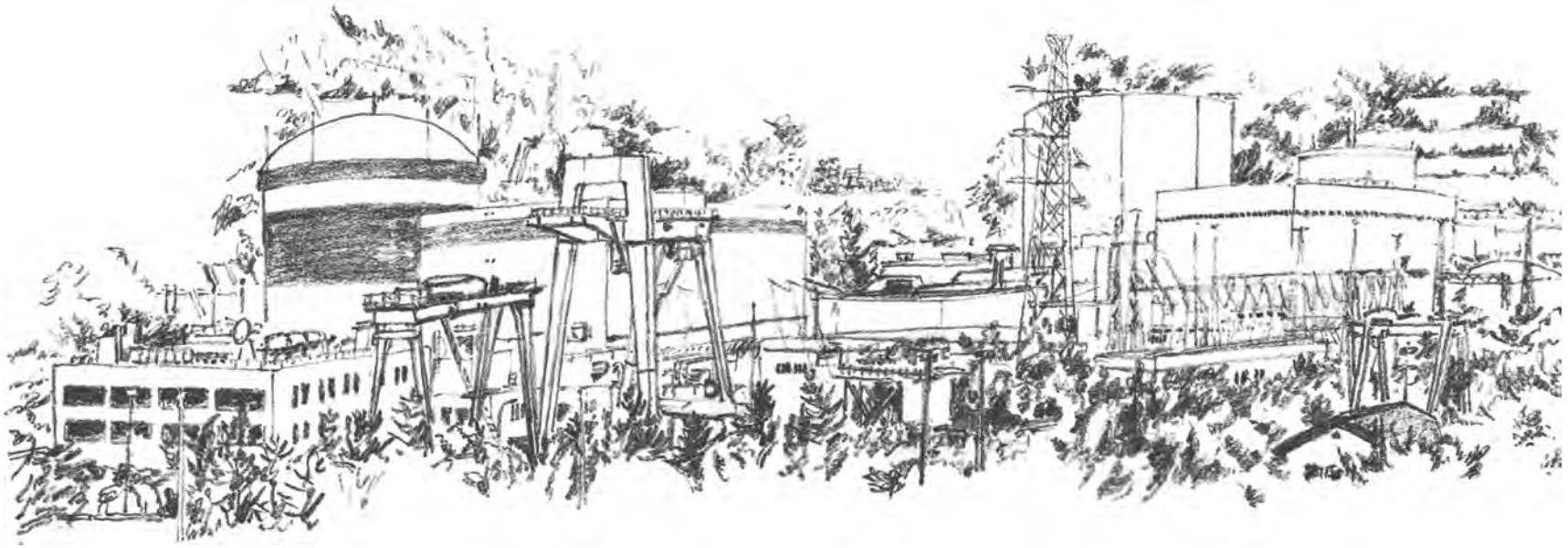
打它家の末裔の一人が、戦後の知のオーガナイザーであり京都学派の中心人物として活躍した桑原武夫である。桑原は、生涯敦賀出身ということにこだわったという。北陸新幹線敦賀駅前に建設される「ちえなみき」（知育・啓発施設、ほかにはない書棚空間）のプロデュースを務める編集工学研究所の松岡正剛は「千夜千冊」の中で「桑原武夫が発動し、指揮し、組織化していった文化プロジェクトの質量は、いまおもうとその後の誰も追いつけないものがあった。追いつけないどころか、桑原が付けた目や打った手は、そうか、こういうことが『底のある文化』というものなのかと得心できるものばかりなのである。そればかりか、桑原によって育てられたすぐれた研究者は、その動向も数も多い」と書いている。宗貞の死後、妻・清月尼のよって作られた梵鐘が現存する。この鐘は、昭和の初めまで、敦賀のまちの時を報じていたという。打它をめぐって脈々と流れる、敦賀の「ち（血・知）」、そして「かね（金・鐘）」。わくわくしてきた。（つづく）

この冊子は、
原子力発電所のある敦賀市で
まちのことを学び始めた
4人の市民を記録するものです。

ここは福井県敦賀市。2年後には北陸新幹線の終着駅となるまちです。いま敦賀には、新幹線開通によって生まれる新しい人の流れに期待し、さまざまな観点からまちの魅力を考え、行動する人がいます。これからこの冊子に登場する4名の敦賀市民も、自らの仕事を通してまちづくりをしている人たち。敦賀には、古くから交通の要所として栄えた深い歴史や、多種多様な食材に豊かな自然と、とにかく「お宝」がたくさんあります。

そんな敦賀には、原子力発電所があります。1966年から始まった敦賀と原子力発電所の関係は、少しずつ変化しながら、今もなお続いています。もはや共に歩んできたと言っても過言ではありません。2015年、敦賀1号機は「廃止措置」という後片付けの段階に入りました。しかし、日本では研究用の原子炉以外、まだ1つとして廃止措置を完了できた原発はなく、課題も山積みです。一方、世界では廃止措置を完了させた事例は多数。諸外国はどのように進めたのか、なぜ完了できたのか。探っていくと、ステークホルダーグループ（以下、SHG）という第三者組織の存在にたどり着きました。

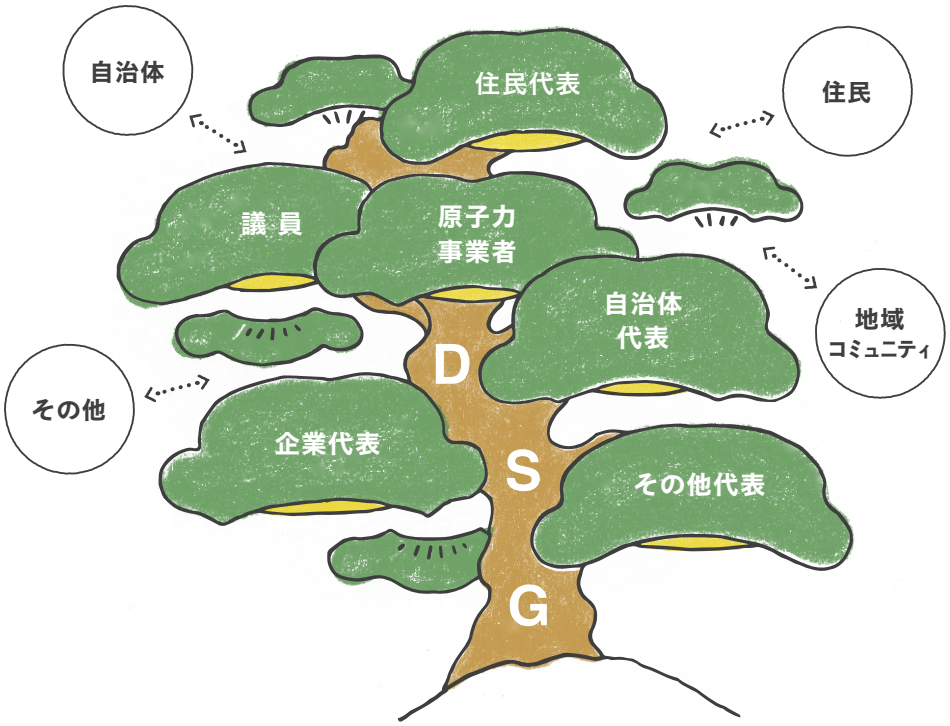
SHGは、原発立地の住民や地域企業、行政、原子力発電所の事業者などから代表者が参加し、まちのこと（原発も含む）を知り、それぞれの立場から議論を巡らせ、まちの未来を考える活動をしています。こうした活動は、日本ではまだ行われておらず、もちろん敦賀にもありません。そこで私たちはまず、「知ること」からはじめてみました。



「ステークホルダーグループ」と まち・地域

諸外国の原発立地地域では、SHGによる活動がすでに盛んに行われています。今回は海外の数あるSHGの中でも、ブリテン島の北東部、ケイスネス郡の北岸に位置するドーンレイステークホルダーグループ（以下、DSG）に注目。株式会社ピー・ティー・ピーが、DSG副議長のストルアン・マッキー氏に行ったインタビューを元に、SHGの活動を紐解きました。

「ドーンレイステークホルダーグループ」の組織図



「まち・地域」の視点から原子力発電所について議論を行うグループ

Q1. どのような人が参加していますか？

住民、商工会議所、ボランティア団体、スコットランド教会、労働組合に政府など、地域のさまざまなコミュニティを代表したメンバーが参加しています。背景や年齢、原発や廃止措置に対する意見もそれぞれです。例えば私は今26歳で、ハイランド州議会議員をしています。

Q2. 役割や活動内容を教えてください

地域住民と原発に携わる事業者との双方向コミュニケーションを活発にする役割があります。原発の複雑で難しい内容を正しく住民に伝え、理解していただくために、フォーラムや集会の開催、新聞広告や web サイト、各種掲示を活用し情報発信をしています。これらを通して、原発事業者の動向監視や住民意見の反映をしています。

おしえてSHG Q&A

Q3. 会合ではどのような議題が出ますか

廃炉が実際にどのように進むのかという話題が多いです。

Q4. 廃棄物の保管所が地域内にあるとか。住民に反対されなかった？

もちろん反対の意見もたくさんあり、DSGではフォーラムを開催しました。すると実は反対意見が間違った情報に基づくこともあったんです。このような場で意見の内容を精査し、事実を伝え、議論を尽くすことが大切だと思いました。また英国の原子力産業は他国と少し異なり、廃炉も国が主導で進めているものが多く、そこが地域との協議において効いたのかもしれません。

参考文献：日本原子力発電株式会社令和1年度福井公募研究「地域と発電所（事業者）等との間のコミュニケーション活動、ステークホルダー活動に関する研究」株式会社ピー・ティー・ピー

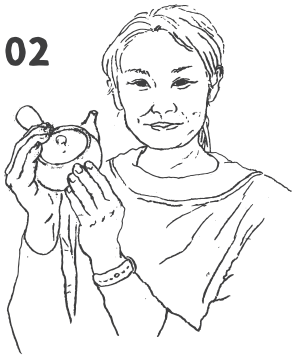
この冊子の登場人物を紹介します



01
大石愛子

かつては銀行、市役所、新聞社に勤めていたが、趣味のアクセサリー作りが広がり、マルシェイベントのプロデューサーに。現在は70歳で起業した父親の会社でイベント担当として活動。2021年に第一子を出産。

クラフトマルシェ
イベントP
育休明け
移動販売に興味
意外と知られていない過去



02
中道尚子

神楽町一丁目にある日本茶専門店の店主。20代を京都で過ごした後、敦賀にUターン。家業の茶屋を継承し、先代から続く小売・卸販売のみならずカフェ事業の展開をはじめた。神楽町一丁目商店街の女将さん会の会長。

茶屋の3代目
おしゃべり好き
日本茶インストラクター
べっぴん会会長
敦賀まつり



03
中村尊子

国の重要文化財に指定される「西福寺」の寺務員（パート）。出身は福井県旧松岡町で、結婚を機に移住。西福寺の修復工事推進や寺の賑わいづくりに寄与。簡単な茶道具を持ち歩き、出先で抹茶を立ててもてなすのが趣味。

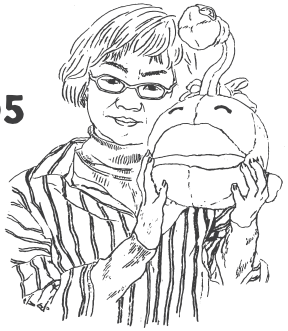
西福寺
押しかけ抹茶の会会長
おしゃべり好き
子供は社会に育てもらう
機織り工場の娘



04
宮本佳奈

呉竹町にある酒屋「ケセラセラーみやもと」勤務。敦賀に生まれ育ち、母と妹夫妻と共に家業である酒店を切り盛りする。地産みかんを使ったビールの開発など、お酒を使った活動に積極的。

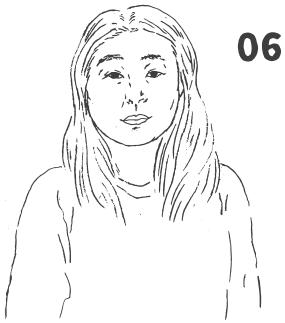
東浦みかんビール
なるようになるさ
お酒大好き
実家の酒屋勤め
意外にめんどくさがり



日本原子力発電（株）
05
磯部昌美

福井県鯖江市出身、福井大学応用物理学科で放射線の測定について学び、日本原子力発電株式会社に新卒で技術職として入社。以来、開発計画から廃止まで、原発のあらゆる側面に携わる。現在は広報を担当。

原電で30年勤務
リケジョ
単身赴任
科学教室の先生
茶道が趣味



（株）ピー・ティー・ピー
06
吉村恵理子

福井県内の三国・丸岡などの地域づくりのコーディネートを行ってきた。廃止措置をまち・地域の観点から捉え、廃止措置を地域理解のもといかに安全に円滑に進めるか、地域振興に繋げる契機としていけるかという課題に取り組む。市民4名と一緒に勉強をしている。

#2001年東京で創業
#愛知県出身
#かつてアート・サブカル拠点運営
#地域・まちづくり
#廃止措置、エネルギー

私たちのこれまでの取り組み「勉強会」

新聞記事で振り返る地元福井と原子力発電 →

なぜ敦賀に原発ができたのか?普段の生活の中で身近なようで身近ではない原発について語り合った。

講師：森瀬明さん（福井新聞社）

原子力発電について →

知っているようで知らなかった原発のこと。安全神話になんとなく浸っていたところがあるかも。

講師：横山勉さん・中川政樹さん

原子力発電所の廃止措置について知る ——→

廃止措置の現状を海外の事例なども含めて学び、先の見えない放射性廃棄物の行方に考えを巡らせた。

講師：柳原敏 教授（福井大学）

敦賀SHGの可能性について話し合う →

これまでの勉強会を振り返りつつ、身近なものに喩えて議論。敦賀にSHGができたらどうなる?

まちの豊かさと原子力 →

これまでの学習を踏まえて、まちと原発の関係性とコミュニケーションについて議論。科学的根拠と感情の差はどのように埋める?

発表会

今までの勉強会を経て、感じたことや変化、意見、今のそれぞれの活動について、発表をした。

気づけば酒屋になっていた。

文・宮本佳奈

小学生の頃、普通の家の玄関にあこがれていた。ちゃんとしたドアがあって、呼び鈴と郵便受けがあって、というそんな普通の玄関に。なぜなら、敦賀の酒屋で生まれた私の家は、玄関＝お店の入り口だった。ガラスの引き戸で中が丸見えだし、店先には「福寿杯」（注①）と書かれたお酒の看板があってなぜか恥ずかしかった。下校時には家に入るところを見られないようにしていたくらいだ。

一方で、小さな頃から桝や漏斗を使って酒の量り売りを手伝っていた。今振り返ってみても、なんだかんだ酒屋の仕事を楽しんでいたと思う。近所の人は空き瓶を持ってお酒を買いに来てくれた（今でいうＳＤＧｓだったかも）し、時々「通い袋」（注②）に一升瓶を入れて配達もした。お駄賃にはお菓子をもらえた。それが母の戦略なのか、気づけば酒屋になっていた。今思えば良かったなと思うし、私も立派な酒好きに育った。

数年前、敦賀唯一の蔵元さんが閉じられてしまった。幼い頃から身近な存在だった地元のお酒がなくなるというのはとてもさみしかった。同時にこうも思った。もしかしたら永遠に在り続けるというのはとても贅沢なことなのではないか、と。それならば、少し形を変えてでも在ってくれたらと思うし、私にできることは何かと考える。最近、敦賀で生まれ育った人だけではなく、お仕事やなんらかのご縁があって敦賀にやって来た人、年齢・お仕事もさまざまな方々と一緒に話す機会があった。皆バックボーンはまちまちだから、きっと気付くところもそれぞれ違うのでしょう。そのとき、私に出来ることはやはり、大好きなお酒という観点から取り組むことだと思った。たとえ形が変わっても、歴史や文化といったお酒の持つ背景を大切に、これからも関わっていきたい。

昔の敦賀があったからこれからの敦賀がある。ただ大好きな敦賀がもっともっと心地よくなっていったら良いなあと思う。そうしたらいろいろなところから「敦賀に住みたい！」「戻りたい！」と、まちが賑やかになっていくだろう。結論！それにはやはりお酒が必要なのだ！



1

注① 今は無くなってしまったが敦賀酒造さんの銘酒
注② 丈夫な帆布でできた甚吉袋

螺旋階段のような時の中で いま私がすること

文・中道尚子

最近「時代は繰り返す」という言葉が理解できるようになった。歴史や情勢のような大きな話ではなく、流行りの服や音楽だけではなく、人や生活においてそれを感じている。とはいえ、ただ単に繰り返されている訳ではなく、少しずつ変化しながら。イメージでいうと螺旋階段のような感じ。

私は子供のころから育った町内で、家業であるお茶屋を継いだ。子どもは男子2人。長男は私の母校である小・中・高に通っている。私の幼少期は町内のドッチボールでたくさんの大人にお世話になり、わが子は学童野球で同じくたくさんの大人にお世話になった。同居する母は、私に「片付けなさい」と言い、私はうるさいなと思う。私は子どもに「勉強しなさい」と言い、うるさいなと思われる。これが同じ日の出来事だったりする。子供の頃、氣比さん祭りにワクワクし、祭りが終わるととても悲しくなったのを覚えている。子ども達も同じように思っているようだが、私がどう思っていたかなんてもちろん教えた事はない。

ある取材で、「お茶屋としてお父さんから受け継いだことや教訓などありますか?」と聞かれ、「特にないですねー」と言った瞬間、「たくさんの人が集まるお店でありたいと思うところは、きっと父と一緒だと思っています」と、付け足した。登場人物や立場は変化しているけれど、どこか似たような風景を繰り返している。受け取って、受け渡す。その一部をいま私は過ごしている感覚だ。

「まちをつくるとは何か?」を自分ごととして考えたときに、「受け取った場所で粛々とお店を続けていくこと、その楽しさを伝えること（というか感じてもらえること）」というのが私にとっての答えだった。できればそこにたくさんの人が行き交うようにしたいし、そこには、世代を超えて店主やお客さんが繋がっていたらうれしい。小さいけれど、これもまちづくりだと思う。

大きなまちづくりももちろん大切だけれど、それぞれの小さなまちづくりをたくさんの人がすることによって「いいまち」になるのではないだろうか。だからこそ、受け渡すその先、螺旋階段の一つ上には「少しいい未来」が広がるように、私は私なりの小さなまちづくりを続けていきたいと思う。







茶でもしばきながら
【第1回】～廃止措置を学ぶ～

今回お招きしたのは、廃止措置の第一人者である柳原敏先生。現在、日本全国で26基の原発が廃止措置の段階にあり、敦賀原発1号機もその一つ。しかし、30～40年かけて進められる廃止措置において、いまだ日本で廃止措置を完了した商業用の原発は、1基もないのが現状です。柳原先生によると、廃止措置を進めるには課題があるそう。どんなことが障壁となっているのか。市民の素朴な疑問にもお答えいただきました。

廃止措置とは？日本はどんな状況？

まずは、「廃止措置とは何か」から話していきましょう。廃止措置とは、「運転を終えた原子力発電所の後始末をする」ことです。2011年の福島の事故をきっかけに、運転停止後にどうやって廃止するかが課題になってきました。それまでは原発の運転年数において特別な決まりはありませんでしたが、事故後に新たな規制が。

これにより、基本40年（最大60年）運転した後は必ず廃止措置をすることになりました。20年は延長できるものの、そのための安全規制はさらに厳しくなります。改修費もかさむので、ならば廃止を進めようというのが現在の状況です。

廃棄物の分類

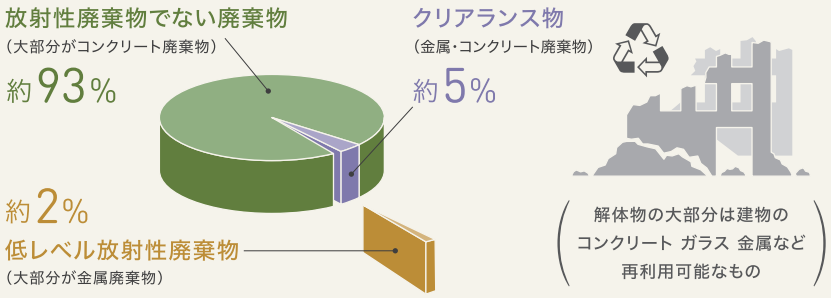
原発の運転や廃止措置からは放射性廃棄物が発生します。これらは高レベルと低レベルに分けられます。廃止措置から発生するのは低レベル放射性廃棄物です。これは放射能レベルに応じて、さらにL1・L2・L3の3段階に分類されます。また、2005年には「クリアランス制度」ができました。これによって、放射能濃度がきわめて低く、放射能レベルが人の健康に対する影響を無視できるレベルであることが、国により確認されたものは、再利用または一般廃棄物として処分が可能になりました。

廃棄物の処分が進まない

しかし分類はできても、低レベル放射性廃棄物の処分場所が決まっていません（運転中のL2廃棄物のみ日本原燃株式会社の施設がある青森県六ヶ所村で処分）。今は地元の協力を得ることが非常に難しいと言われています。だから、電力会社と国が協力して地元の了解を得ていく必要があると思うんです。また、クリアランス制度に対する一般の理解が得られるまでは、「限定的な再利用」に限られています。限定的な再利用をするためにも加工業者が必要ですが、風評被害などを考えるとなかなか進まないのが現状です。

図1：廃止措置に伴って発生する廃棄物の量と種類

（出典）日本原子力文化財団「原子力・エネルギー図面集」より作成



―廃止措置の概要を知ったところで、ここからは市民が気になっていることや疑問に思うことを、柳原先生に質問してみました。

クリアランス制度の使い方

中道　外国と日本でクリアランス制度に差があると聞きましたが、日本は厳しいんですか?

柳原　クリアランス制度そのものには大きな違いはありませんが、日本はその運用が厳しいんです。例えば、外国ではクリアランスされたものをすでに市場に出して有効利用しています。アメリカやフランスのように制度を法律で定めていない国もありますが、同じように資源の有効利用は進んでいます。対する日本はいまだ限定的な活用のみと、制度を活かしきれていません。

宮本　運用と言うと、日本ではクリアランスする時には必ず測定が必要ですよね。その辺りが厳しいと。でも、測定ってそんなに手間なんですか?

柳原　一般的には100kg程度ごとに分けて、汚染の可能性のある面を出して上下から測定します。

磯部　その準備が大変なんですよ。例えば配管のような筒状のものだと中が汚れている可能性があるでしょ。

吉村　だから測定時には切断して中を出すと。毎回やるのは大変ですね。

柳原　これでは手間なので合理的なやり方を考えなければなりません。

「放射性廃棄物ではない廃棄物」とは

中道　「放射性廃棄物でない廃棄物(P12図1参照)」をクリアランス物とは別に定めていると聞きました。

柳原　クリアランス制度では放射能を測定してクリアランスできるか否かを判断するのですが、「放射性廃棄物ではない廃棄物」は使用の履歴から判断して、汚染の可能性がないとなれば、有効利用できます。

宮本　履歴って、そんな簡単に判断して良いのと思うけど…。

磯部　履歴というのは、物をどこでどのように使用したかを細かく記した記録です。これを基に、少しでも汚染の可能性があるものは放射性廃棄物とするか、除染後にクリアランス可能かを確認してから有効利用する





ことになるので、かなり厳しいですよ。

柳原　そもそも原子力施設内には、管理区域というのがあって、出入りの際には持ち物検査と放射線測定が厳重に行われるので、物を自由に持ち出すことはできません。そんな中で、確実に汚染履歴がない物まで測定するのは合理的ではないですよね。

放射線は「光」みたいなもの?

中道　現時点の日本では、クリアランスされたものの再利用品は原子力事業者の管理下のみ使用可能とされていますが、スウェーデンなどでは一般流通しているんですよね。ということは日本にも入ってきているかもしれないんですか?

柳原　スウェーデンなどではそれが当たり前だから、可能性は十分あります。

宮本　いくらクリアランス物の放射能レベルが低いとはいえ、小さな積み重ねが体内で蓄積して被ばくすることはないんですか?

磯部　放射線は光のようなものだから蓄積しないですよ。

柳原　被ばくの原因は、体の外から放射線を浴びるか、放射線を出す物質を体に取り込んでしまうことに起因します。そういう物質を体内に取り込んでしまうと、ずっと放射線を浴び続けてしまうので被ばくします。

吉村　排出されないんですか?

柳原　排出されます。汗をかいたりお手洗いに行ったりすれば、放射性物質は体内から出ていきます。

廃棄物の行き先

中道　低レベル放射性廃棄物は地下に埋めますよね。見えなくなればOKみたいで違和感があります。

宮本　日本海溝に埋めたら、そのまま徐々に地中深くまで潜っていってくれないかな。

柳原　災害を考慮すると、地下に埋めることが一番安全なんです。埋めた後はそこから50年から数百年間管理します。放射性廃棄物は、世界中が海洋投棄を考えていた時代もあります。環境保全の観点から禁止されましたが。

宮本　それで地上に処分場が作られたんですね。クリアランス物の再利用として漁礁にするのはどうでしょ

←次頁へつづく

う？解体物の中で一番多いのがコンクリートでしたよね。

柳原　いいアイデアですね。実際に漁礁やテトラポットへの活用は議論したことがあります。しかしそのためには日本もクリアランス物の一般流通と、加工事業者の確保が必要ですね。

宮本　国が一般流通の許可を出すためには、まずは社会定着が求められるとのことでしたが、何を持って定着したと言えるんですか？ここが曖昧だと、ずっと敷地の中から出せなさそうです。

柳原　国もそのことを考えていると思いますが、まだはっきりするには時期尚早と考えているのでしょう。外国では、様々な決定をするときにステークホルダーが意見を出し、それが取り入れられているようです。ＳＨＧが「自分達でやらなきゃ」と強い意志を持って社会を変えていっています。

吉村　一人一人が当事者意識を持っているんですね。

お金の話と廃炉ビジネス

柳原　ところで、１ｋＷｈあたりの電気料金がいくらか知っています？

中道　え、合計しかわからない。

柳原　契約の仕方や電気の使用量によると思いますが、我が家は30～40円くらいです。

吉村　敦賀は電気代安いですか？

中道　価格は他の地域と一緒だと思いますが、年１回給付金があります。電気使用量に応じて、10％くらい返ってきますよ。それで敦賀に住所を移す人がいるとかいないとか…。

柳原　皆さんが払っている電気料金に廃止措置のための費用も含まれているんですよ。

宮本　なるほど、運転が止まったら稼げないからか…。廃止の細かな方法は考えていないのに、お金はプールしていたんですね。

中道　でも何十年という計画ですら延長しそうなのに、本当にそれで賄えるんですか？

柳原　欧米と同様に、電力会社は廃止措置に必要な費用を試算して、資金を確保しています。ただ賄えるかは処理の手間次第ですよね。では廃止措置で一番お金がかかるのは何だと思いますか？

中道　人件費とか？

柳原　文献によると、１つは輸送費も含めた放射性廃棄物の処理処分費用。もう１つがプロジェクトマネジメント費用。この２つで全体の60％くらいかかります。残りは解体費用や装置の費用などです。

中道　廃止措置に関わる事業者は儲かりそうですね。

柳原　ビジネスとして捉えるのもアリだと思うんです。海外では、廃止措置用にプールしたお金もセットで廃止措置専門業者に引き渡しています。日本もそういう仕組みを整えないと、海外企業に参入されてしまうかもしれません。

中道　電力会社に子会社がたくさんあるように、廃止措置の会社をつくるのはどうでしょうか。

磯部　廃止措置は特別な仕事ではないので、専門の会社まで必要かどうか…。管理区域は別ですが、基本は普通のビルの解体工事と同じなので。

柳原　廃止措置には解決できていない複合的な問題がある中で、プロジェクト全体をマネジメントするならば、特殊な会社として成り立つと私は考えています。

宮本　医薬分業みたいですね。診察は医者、処方は薬局というような。

柳原　社会全体としてそういう潮流がありますよね。

磯部　原発のような危険が伴うものを、別の会社に引き渡すというのは丸投げしているみたい。社会が不安にならないのでしょうか。

中道　大事なのは責任の取り方じゃないですか？商業用の原発が日本に初めてつくられた時には、さまざまな電力会社の出資で日本原電という会社ができましたよね。同じように廃止措置の会社をつくる案もあるのでは？それなら得体の知れない会社ではないし…。

柳原　日本原電は日本の原子力のパイオニアとして、建設や運転で大変貢献してきたと思います。ただ、廃止措置で電力会社としての収益が出るわけではないので、そこにビジネスを見出せるような会社が必要だと思うんです。原発に加えて研究施設などを含む多くの原子力施設で、これから廃止措置が必要となりますから、専門の会社でそれを完遂させるのもアリだと思うんですけどね。

皆さん和気あいあいとした雰囲気がいいですね。業種も全く異なる皆さんと話していると、いつもと違う視点から物事を考えられて、新鮮でした。



Profile

柳原 敏　やなぎはらさとし

福井大学附属国際原子力工学研究所特命教授。日本原子力研究所（現、日本原子力研究開発機構 ＪＡＥＡ）の元研究員。日本における廃止措置の第一人者。当初は原子力の安全性研究に従事していたが、日本初の発電用原子炉「JPDR」の廃炉に携ったことをきっかけに、以降、廃止措置を専門としている。

つるがとワタシ

文・中村尊子

西福寺というお寺の寺務員として、思いついたことを自由にさせてもらう、それが私の仕事になっている。敦賀って面白いよねえという一面を伝える、体験してもらう、そんな約束で寺務員になったわけではないけれど勤続7年目になってもワクワクいっぱいで通寺している。

敦賀に住んで21年目。いま好きな眺めは自宅玄関真正面の景色。草いっぱいの堤防、野坂山、空。山がモヤで隠れる、霜がおりる、雨、雪、どの日も好き。堤防を散歩や通学する見知らぬ方々の姿すらも絵になる。生まれ育った旧松岡町には古墳勤続があったし海から遠かった。山が毎日近くに見えるのはより私に馴染むのかも。実家の近所では「(機織り)工場の子」と呼ばれていたし、実際にうちの工場では羽二重を生産していた時期もあった。福井県は繊維の町、だから羽二重餅があるという自然な認識だと思っていたが、「これ、嶺南の人は案外ご存じないのかも」ということが先日あった。同じように、私は嶺南や原発への知的好奇心がなかったため、何も知らぬまま敦賀にやってきた。結婚相手も福井市出身で、少々珍しい会社、「原子力発電訓練センター」に勤務。名前そのままの会社で、原子力発電所の運転員に、発電所の運転をシミュレーションしたり訓練したりする会社だ。でも私は原子力発電所への興味はゼロ。「原発銀座」という言葉は関東に住む叔父から初めて聞かされてその意味を知った。

初めはいらないと思っていた子どもができて、育って、そのうち市内一番の商店街パワースポット「中道源蔵茶舗」の中道さんと親しくなり一緒に日本茶インストラクターとして学校を巡り、気比神宮の氏子、雅楽隊にもなった。そんな中で、敦賀と原子力発電所は、山や海があるように原発がある、ただそれだけなのかなという認識になった。なにを強調するでもなく流れのままに誰かがきめたことで原発のナニカが動くのなら、それすらも夕焼けの空を眺めるように、ああそうなんかあと受け入れていく。そんなものなのかしらと思う一市民となっている。







ＳＨＧとの出会いがなければ、「げんでん」からの便りにも、原発関連の新聞記事にも目は向かなかった。これは大多数の市民の日常だと思っているが、どこに住んでいようともよほどその対象物に関心がなければそんなものではないかしら。(賛成というより)関心2割、反対2割、日和見6割。この法則は何にでも当てはまる、はず。6割側の私もやや関心2に寄ってみよう、か、な…。そんなだから、やはり今でも日和見から脱出できていないかも。

立石をたずねて

Interview report

道下泰宏さん

敦賀半島の先端、敦賀湾の入り口に位置する立石は、湾内のおだやかな海と対岸の山々が望める、世帯数23軒ほどの小さな集落です。敦賀原子力発電所があるのもこのエリア。ここで生まれ、日本原子力発電株式会社（以下、原電）で定年まで勤め上げた道下泰宏さんは、当時の人々の暮らしや原発建設時の様子をよく知る貴重な方。ご自宅にお邪魔し、立石の変化や原電在籍時のエピソードをうかがいました。



たくましく育った幼少期

道下さんが生まれたのは、昭和17（1942）年のこと。その頃の立石は、漁業を生業とする男性がほとんど。海沿いには船がずらりと並び、漁村らしい風景が広がっていた。また女性たちは、毎日1時間ほどかけて、自分たちの田んぼまで徒歩で通っていた。いわゆる「男は漁業、女は農業」を営む、半農半漁の集落だった。

まだ道という道がなく、道下さんは田んぼのあぜ道や浜沿いを歩きながら、5kmほど離れた学校に通学していた。物心つく頃から手漕ぎ船の操縦はお手の物。土曜の半日授業が終われば父親の漁を手伝っていた。学校までの通学や船漕ぎは、道下さんの腕や足腰を自然と鍛え上げた。もともと体格に恵まれていたこともあり、さまざまな地区の相撲大会で大活躍。「敦賀では誰にも負けなかった」と笑って話す。立石での暮らしは、負け知らずのたくましい身体づくりに役立っていた。

まちに発電所がやってきた

敦賀原子力発電所1号機の建設が始まったのは、昭和41（１９６６）年。発電所の建設に先立ち、海岸沿いの道が整備された。道路の完成で生活が便利になったと思われたが、「発電所のおかげで10年くらい早く道路ができたかもしれない。けれど、立石の人間が驚いたり喜んだりというのは特になかったなあ」と淡々と語る。当時立石では一家に一船が当たり前。車を持つ者など誰一人いなかったのだ。

そもそも、なぜ立石に原発ができたのか。もともと、県は旧坂井郡川西町に建設を計画していた。しかし、地質の関係で建てられないことがわかり断念。次の候補地として、敦賀半島の先端に白羽の矢が立った。建設の決定に、地元では賛成も反対もなかったそうだ。

「『お国が言うなら仕方がない』という人が多い時代。建設用の土地も二束三文で売ったと聞きます。今ほど立地も難しくなかったと思う」。

当時、道下さんは22歳、京都の化粧品メーカーで働いていた。しかし、父親の勧めから原電に事務職として入社を決め、地元へ戻ってきた。まだ原電の事務所はなく、敦賀市内にあった北陸電力の営業所を一部お借りし、資材発注や総務関連などの業務に取り組んだ。現在の敦賀事務所に移転してからは、本社からの来客対応や市内の窓口のような仕事をするように。事務所には所長を含め3人しかいなかったが、穏やかで充実した日々を送っていた。

自らは口にしない苦労

そんなある日、トラブルは起きた。昭和56（１９８１）年、一般排水路に放射性物質が流れ出してしまった。通称「56問題」である。調査の結果、幸い、流れ出た放射性物質は少ないことが分かり、周辺への影響は極めて小さかった。しかしメディアで大きく取り上げられたこともあり、風評被害で敦賀の海産物が一部市場へ出荷できなくなった。そのときの様子を尋ねると、はにかみながら「正直、あまり覚えてないんだよね」と答える道下さん。しかし後に、当時の社員から事故当時の道下さんの仕事ぶりを聞くことができた。本社社員の受け入れや行き先の手配、マスコミや原子力慎重派への対応、その他庶務的なことなど、その仕事量は計り知れないものだったという。飄々としした口ぶりからは想像もできないくらい、多くの困難や苦労を乗り越えてきたのだろう。







アルバムには当時の新聞記事も。
取材後、かつて区長を務めた道下さんと立石を散策。

変化した「まちとの関わり」

事故以前、原電と敦賀市民との交流は決して活発ではなかったが、これをきっかけに、「市民と社員を繋げるような活動に力を入れるようになった」と話す。道下さんは、いわば原電広報の礎を築き上げた人だろう。敦賀まつりをはじめとする地元イベントへの積極的な姿勢は、現在も社内で受け継がれている。「僕は間違ったことが許せないから、よく上司にも立ち向かっていた」と苦笑いを浮かべる。多くを語らずとも、しゃきっと伸びた背筋からは芯の強さがにじみ出る。



取材を終えて（中村尊子）

緊張しながらうかがいましたが、道下さんの柔和なお顔に心が和みました。常にご自分を律し、努力は見せない「男気」のある姿も印象深かったです。原電をはじめ、立石に長きにわたって貢献してくださる道下さんのような存在は、今後も必要だと改めて感じました。

生まれてきた こどものために 思うこと

4

文・大石 愛子

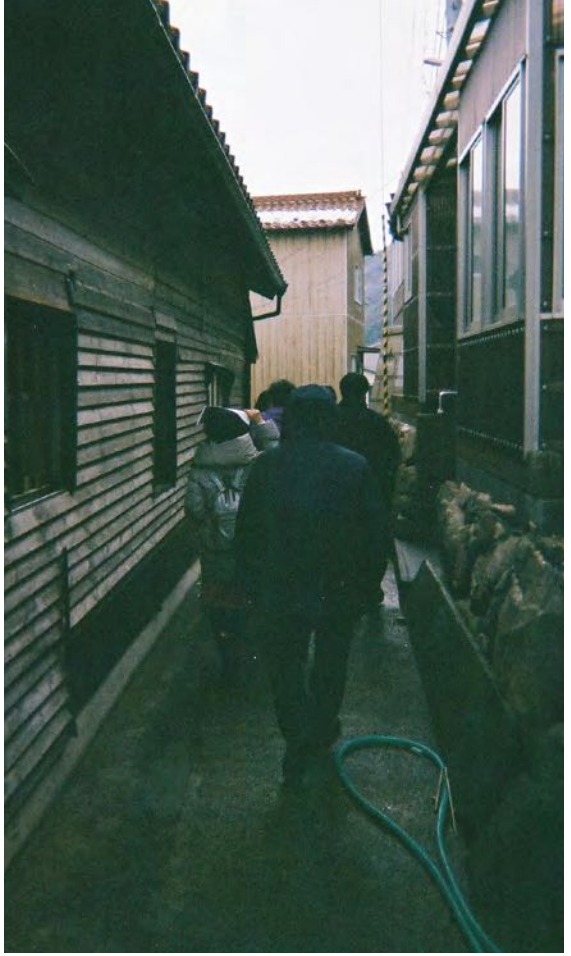
普段生活していて、「自分の住んでいるまちがこんな風になればいいのにな」と思ったことはありませんか。きっと思うだけなら簡単で、その「こうなったらいい」という思いのほとんどは自己消化で終わってしまうかもしれません。私はこどもを出産したことを境に、これからこどもたちの住むまちが、安心安全で幸せな暮らしができるまちになればいいなと、より一層思うようになりました。

では、これからの時代をどうやって生きると幸せになれるのでしょうか。幸せは人それぞれ感じ方が違うので、明確な答えはないでしょう。しかし、これからの時代は今までとは違い、自分を表現し、自分らしく生きることが求められるのではないかと思います。自分は何が好きで、どんなことに興味を示し、どこに感情が動くのか。好きに素直になり、好きを極めていく。そうすることで自分の欲求を満たすことができ、社会的にも必要とされる人になれます。人は人に必要とされることで幸せを感じられると思うのです。

それでは、こどもたちにそうなってもらうにはどうすればいいのでしょう。こどもたちが「好き」や「興味を持つ」ことに出会うために、なるべく多くの経験をさせることです。今やインターネットに頼れば簡単ですが、実際に見たり、聞いたり、経験させてあげることで芽生える感情があると思います。それによって見つけた「好き」を伸ばしてあげる環境をつくることが、親としてできることではないでしょうか。

地域の未来を担う次世代のために何ができるだろうかと常に問い続け、そして自分にできることから始めていけたらと思います。





LOOSE LEAF

わたしとまちと原子力

2022年3月 発行

市民　大石 愛子
中道 尚子
中村 尊子
宮本 佳奈

発行　敦賀 SHG
協力　日本原子力発電株式会社

編集　西山 綾加
デザイン　Amateur&Co.
イラスト　さわだ はるか
テキスト　荒井 里美

あとがき

ステークホルダーグループという名前を聞いて、私が最初にイメージしたのは株主。つまり、私もはじめは言葉すら知りませんでした。まさに、一つ一つ「知ること」から始めた冊子作りですが、さてどんな内容にしようか、これにはとても悩みました。何度も行き詰まっては、この冊子に登場する方々に、言葉の意味や勉強会の感想などを何度も聞きに行きました。その時にうかがった言葉がとても印象に残っています。

「“安全”に運転するのは事業者の仕事だけれど、“安心”はこちらが感じることだと思うのね。私も“知ろう”としなくてはいけないんだなと思ったの」

「伝えること」の壁に、どれほどぶち当たってきたことでしょう。自分と他者の間には言語、文化、世代、価値観…などなど、いつもどうしてもズレがあります。だからこそ伝えることは難しく、それでいてとても大切なことです。人類が何万年もの歴史の中で、あらゆる伝達方法を編み出してきたのもきっとそういうことだと思います。

この冊子が伝えることが、正直今の時点ではわかりません。でも、伝わっていなかったら、また考えて、やり直して。そうやって手を尽くしていく過程で、少しずつ進歩していくのが人間なのだろうと思います。

編集　西山　綾加